

昭和二十年十月～十二月の三カ月間に百十人

昭和二十一年一月～五月の五カ月間に百十三人

合計八カ月に六百二十三人

第三〇收容所管内の総死亡者九百四十人の内、

この八カ月に六百二十三人、全体の約六六パーセントが死亡しており、ソ連の調査においても他の收容所の例ではありませんが、死亡原因の五一・六パーセントは栄養失調症と報告されておりいかに栄養状態が悪かったか想像できます。

またソ連の報告の中で日本人の捕虜收容所における死亡率はドイツ人の捕虜收容所における死亡率の二倍である（〇・四～〇・一五）と報告されています。

輸送中の食糧事情、環境の悪さに加えて、厳しい気候条件、満足な住居施設がなかったこと、あらゆる種類の物資が不十分であったことがその原因と考えられます。

## 私の青春時代

秋田県 藤盛 定芳

私は、藤盛家の三男として生まれましたが、長男及び二男が幼少にして死亡してしまいましたので、生家の後継者として水田三反五畝歩、畑二反歩、山林二反歩の農家の経営を受け継がなければならなかったのです。しかしこのような零細農家では生計がなり立たず、花岡小学校を卒業すると郡立扇田準備場で一年間勉強をして、昭和十六（一九四一）年三月卒業して、同年五月には軍属を志願し、満州の関東軍情報部特務機関に勤務することとなりました。

これには父母はあまり賛成ではなかったようでしたが、この当時は大満州国建設の旗印の下に、若い青少年即ち青少年義勇軍を募集して渡満させたり、あるいは開拓団に若い花嫁さん等を送っていた時でしたので、家族にも何とか容認してもら

つたのです。

八月一日、大館駅より列車にて一路下関港まで、そして船にて釜山港に上陸、鮮満国境を通過して北上し、ハルピンに到着しました。

下車して徒歩で街中を歩いて行きます。当時のハルピンの街は洋館造りの家並みで私の生地の一町とは全然違った異国情緒に驚きました。街行く人達も外国人の顔が多く歩いていました。とくにロシア革命から逃れて来た白系ロシア人が多く見られました。

ここハルピンには関東軍が駐留して警備に就いていました。我々の特務機関も近くに在り、常に軍の特務機関と密接な連絡を取り業務をしています。

昭和十九年三月、私も徴兵検査を受けることとなり、現地で受験、第一乙種合格となりました。

そして同年五月、勃利に駐屯している対戦車野砲隊第一三〇四部隊竹中中隊に入隊することとなりました。

この部隊では歩兵の一般基礎教育の一期検閲を受けましたが、兵舎はオンドル式の立派な兵舎でした。北満の大地は外に出ると厳しい寒さでした。広々とした雪景色で白樺の林が見える雪原の中の訓練です。戦車の操縦は主として古年次兵の方が行い、我々初年兵は野砲の弾薬の装填係でした。ここ勃利はソ連との国境に近く、いつソ連軍が越境して来るか分かりませんので毎日が緊張の猛訓練でした。猛訓練が終わり食事となりますが、高粱の入った飯で腹は満たされましたが、栄養価は低く、空気が乾燥しておりますので結核患者が出てきました。

演習が終わって兵舎に戻った夕方に、真っ赤な大きな太陽が西の地平線のかなたへ沈んで行く美しさは、北満でなければ見られない光景です。

ようやく一期の教育も終わり、再びハルピンの第三四五部隊に編成替えとなりました。この部隊はロシア語を教育する部隊でした。私は入隊前特務機関に勤務していたためか、毎日が軍事教練で

なく、頭が痛くなるほどのロシア語の猛勉強でした。

対ソ戦に備えて配備されていた関東軍百万の精銳も、南方戦線の激戦地に展開することとなり、満州にはソ連に対抗できる軍隊はいなくなりました。これを見たソ連軍は八月六日、日ソ中立条約を一方的に破棄して、怒濤の進撃で満州を侵略したのです。

ついに八月十五日、終戦の大詔が下され、戦争行動は停止されましたが、私達は九月中旬ごろまでハルピンの警備を命ぜられて、市内の警備に付いていました。

やがて部隊は牡丹江郊外に集結させられ武装解除となりました。

この後、我々はどこへ行くのか、兵隊の私達には何も分かりません。ただ大平原の中に建てられたバラック小屋での生活で、夜となるとどこで吠えるか狼の遠吠えが聞こえて、なおさら寂しい夜を過ごしました。

九月三日、いよいよ部隊は宿舎を出発、貨車に乗せられ、ソ満国境を通過し、初めに着いた所はピロビジャン収容所でした。

建物はバラック造りで、十一月ともなると零下二〇度の寒さとなりました。床は板張りだけなので背中が痛いので草を敷き、毛布は一人一枚だけです。朝は六時起床、食事は八時です。食事当番は起床すると、六時三十分までに食事の支度をして、七時に食事の「ベル」が鳴り、当番はバケツに「燕麦」と高粱を混ぜたのを椀に盛ります。

初めは家畜の飼料同等の物ですから口にいかれどもなかなか喉を通らなかつたのですが、腹が減るので背に腹は替えられず食べていました。黒パンは一日一食だけでした。

食事が終わると、九時、兵舎前集合、ノコギリやナタ等が渡され、宿舎から四、五キロ離れた白樺林へ行き、伐採作業をするのが毎日の日課でした。伐採した木材は主として工場や一部民家の燃料とするのです。二人一組になって、車に積み

込む道路まで運ぶのですが、作業中ケガ人が出たり凍傷になったりする者が出ます。すると医務室へ行って手当を受け、病人となると病院に入院となるのですが、初めの医務室での診断結果で入院出来る者と死亡する者も出る始末です。

作業は午前は三時間で、昼食時間は休憩一時間、昼食は蒸麦と高粱の混ぜたものを、各自飯盒で炊いて食べます。午後は四時に作業が終了します。宿舎に帰り着くのは午後五時ごろになります。いくら汗をかいても一週間に一度のドラム缶風呂です。

夕食は七時、消灯は九時、就寝するのですが寒くて寝られないので暖炉に火を焚いて暖をとります。

また、班内からは交替制で農場へ人夫として出役し、野菜や馬鈴薯の手入れや家畜、主として豚の飼育管理等をやっていました。

このような生活を二年半くらいやらされていたのですが、私が軍隊入隊前に特務機関に勤務していたことで戦犯の疑念を持たれ、ハバロスクへ

送られたのです。誰か証人がいれば罪は軽減されたのですが誰もおりません。どうなることかと心配でしたが、その後特別な制裁も受けませんでした。なぜだったのかとよく考えて見ますと、私はロシア語を習っていたばかりに、ある時ロシア語で話したのが原因らしいことが分かりました。そしてナホトカの収容所へ送られ、ここで約二年間、以前のような仕事はなく、ただ毎日復員の日を待っていたのです。

昭和二十五年四月、待ちに待った復員の日が来ました。ナホトカより復員船に乗り十年振りに日本の舞鶴港に上陸、故郷に帰ることが出来ました。帰った時はまるで浦島太郎で世の中のめまぐるしい復興の波に驚くばかりでした。

しばらくはルンペン生活を送っていたのですが、やがて地元の花岡鉦山のボーラー係として勤務しました。昭和二十九年に結婚し、子供は三人、全員独立しています。昭和五十五年に停年を迎え、現在は妻との二人暮らしです。今考えて見るに、

あの青春時代の十年は私の人生の中で何であったのでしょうか。戦争という悲惨な歴史がなかったら無上の幸せな人生が送れたものにと、深く考えさせられます。

戦後六十年、敗戦後の平和を、覆すような戦争を絶対にやってはならないと念ずる次第です。

## シベリアの思い出

宮城県 小 関 太郎作

私は昭和十八（一九四三）年召集になり、仙台に入り、小樽に行きました。船で時化に会い、船員さえも初めてと云うほど船が揺れました。飯盒を持って甲板で滑ると空高く舞い上がってしまう。そういう暴風雨でした。さらに北へ向かい、エトロフに上陸しました。私は野砲隊で守備隊として、ここに陣地を敷いた訳です。ちよろどロスケが参戦して満州からこちらへ来るそうだから穴でも掘って入ろうと云うことでしたが、その内に八月十五日の玉音放送でした。その時は皆で万歳をしたのです。「良かったなあ」と大の字になって休んだ思い出があります。そしてソ連軍の武装解除を待った訳です。

来た兵隊は背の小さい兵隊でしたが、三日ぐらいはゴロゴロしていました。乾パン二袋を持たさ